

「“親切”プレゼント大作戦」

4年生が「ともに生きる、わたしたちにできる

こと」というテーマで総合的な学習の時間に、人のために役立つことや人が喜ぶ活動に取り組んでいます。赤い羽根共同募金もその一つですが、児童の中には、登下校時に通学路に落ちているゴミを拾いながら歩いている子もいます。

全校集会でこのことを紹介し、さらに、「学校の中でもお互いに人が喜ぶことをやり、それが学校中に広がれば、学校中が幸せな気持ちでいっぱいになると思います。想像だけでは本当かどうかわからないので、みなさんの力を借りて実験をします。」と投げかけました。

それは、次の日（11月29日）、学校に登校してから下校するまでの間に、二人以上に親切なことをする。ただし、親切を広げるために自分が何かをしてもらった人以外に親切なことをするという条件をつけました。相手から「ありがとう！」と言われたら、ミッション成功。その時の気持ちはどうだったか、そして、自分が親切にされた時、どう思ったか、を「ほうこく書」に書いて提出するという内容でした。

その結果、「だれかに何か親切なことをして、ありがとうと言われた児童」と「誰かから親切にしてもらった児童」の延べ人数は282人でした。平均すると一人3回ほどの親切な行いと感謝の言葉が行き交ったことになります。親切な行為の内容は、「ひろってあげた（ひろってもらった）」、「教えてあげた（教えてもらった）」、「手伝ってあげた（手伝ってくれた）」、「貸してあげた。（貸してもらった）」など小さな事柄がほとんどですが、「保健室に連れて行ってあげた。（連れて行ってくれた）」、「元気がないので励ました。（励ましてくれた）（だいじょうぶ？と言ってくれた）」など思いやりの行いもありました。また、「ありがとう」と言われて感じたことは、「言われてうれしかった」、「よろこんでくれてよかった」、「気持ちよかった」、「してあげてよかった」、「役に立ててよかった」、「すっきりした」など予想どおりでしたが、「ごくふつうに言われていたけど、気にしてみるとすごいことだと思った」や「よいことをするのは大切だと思った」、「親切なことをたくさんしようと思った」など、**新たな気づきや意思に触れた児童**もいました。また、親切にされた時に感じたことは、「うれしかった」、「ありがたいと思った」、「たすかった」、「やさしいと思った」などの他に、「自分もまねしたいと思った」や「『ありがとう』と意識して言えてよかったことに気づいた」などの記述がありました。

あ
り
が
と
う

作戦は成功です。親切な行為や感謝の言葉が広がると、幸せな気持ちになるようです。誰一人として「嫌



な気持ちになった」という児童はいなかったのですから。